





### <

2000年を迎えて	1
ふるさと名山探訪	2
据山、吉武山、野福山	3
祖母~傾縦走(1)	4
二度あることは三度ッ	5
ミレニアム記念登山	6
私の無名山ガイドブック	6
平成十一年度年次晚餐会	7
お知らせ	8
役員会からのお願い	
2月月例山行のご案内	
40周年記念誌原稿募集	
記念事業準備など当面の	予定

場 t り鉾岳を望む

支部でも会員の多くが海外を経験して ったもの りません。 で実施されて レニアム記念のさまざまな企画が各地、 もちろん 常茶飯 でなりましたし、 二〇世紀最後 れを告げて二〇〇〇 なりましたし、大分県内からの海外登山もたものの、中高年登山者の激増は社会問題とかってのような登山ブームは見られなくない問、登山界の様相も大きく変わっていま 4 事と思えるくらい定着してきました。

ました。だが、これで満足しているわけにはいように支部所属会員数はこれまでの最大に達し 当然、若さあふれる年齢層も入会して、 支部の仲間に入っていただくことができました。組織的には会友制度の新設で、新しい登山層に 1000年は 「変革の年」と予想されていま

前述の

ます。

きません。

・・・ たさんとともに喜び合いたいと思い を開き、支部の存在を登山界だけでなく、広 を開き、支部の存在を登山界だけでなく、広 場内外に知らしめましたし、三十月年 の総意で選官。 と取り組んでまいりました。支部役員を主体に、十周年と全国支部懇談会に向けての準備に着々 ブックを発刊、中高年登山者を中心にブーの総意で選定された「大分一〇〇山」のガ 起こすこともできました。そして一昨年以 支部会員数過去最大の記録で迎えたことを、 分県内で開かれるからです。この意義ある年を、月には当支部を主管として全国支部懇談会が大 業が計画されています のみなさんとともに喜び合いたいと思います 備会だけでもすでに十回を超えていま 支部の創立 今年は記念すべき 知らしめましたし、三十周年では会員 年となります。 年に当たりますし、 東九州支部にとって 登山文化展など と言うの 周年をい 十周年 ガイド 来 秋 広く MA

# 二〇〇〇年を迎 え

T

秀

でとうございます。一

九〇〇年代に

徳

の年でもあります。この

年代を迎えました。

ために同時

登山界もその例外では

各団

ことでしょう。 恐らくかなりの変化が見られる に立つべきでしょう。 かっています。 文化、スポーツなど、あらゆる 動きに乗り遅れることは 準備する年でもあり、社会 様変わりする時 の夜明けを最 支部として、こ 登山の世界でも 期に差し掛 先頭 許さ

集することが求められています。 四十周年と全国支部懇談会開催 を実行しつつ、成果を支部に結 ンスとなります。 が山や登山行為について真剣 そのためには、会員一人ひと その力を発揮する絶好のチ そのうえで新しい登山

えています。これまでの役員中記念事業の準備は大詰めを迎 くなっています。 なさんの積極的な参画を期待し 案、運営では間に合わな 支部会員のみ

## 恒夫氏と さと名 Ш

一九九九年十二月十八 歩いた宮崎の山 十九日)

加 藤 英 彦

ックスの年 『ふるさと名山探訪』というネ 間行事として今年は 廣さんが (株)アシ

橋を渡る。『滝見橋』

「平成十

は

の市

地や日

北面 次方に

スへと下山。わりと楽な下り

9 山頂

好天にも恵ま

れた東 雞

があり、

先発隊はそちらの

からの眺望は南に開けて

ぐに『県民の森』に

おりる案内

ミングで全 国各地 の名 Ш を

登

年七月」とある。

下

0

自

乢 県の山ということで法華院温泉 ・二十六日、梅雨のまっただ中 川コースより同行させていただ った時に九重 日 た。 そして今回 いた。そして今年の六月二十五 った時も支部 に一泊して大船山、平治岳に登 に同じふるさと名山探訪の大分 本百名山を一二三日かけて登 じ(株)アシックスの企 廣さんとは一九 岳が三回目の山行となっ 0 一山 (久住山)を 宮崎県の山、行縢 員数名と同行した 九五 Ŧ.

行縢山 (八二九米)

ある行縢神社入り口着九時四十由して、重廣さんとの合流点で あ」でトイレ休憩の後延岡を経 車六台、一路南下、「らめ 一二月十八日七時 サニー ·出発 ŋ

一時間半。や した 道と合流。さらに石のゴロゴロ 0 へ急ぐ。 に右岸にわたると神社からきた 事情を説明して登山口の駐車場 アシックスの 港八時十五分着で車にて陸路を 出発。さて、残った組は熊本空 して先発組十二名は十時過ぎに ここで一行十八名自己紹介を 小川沿いに左岸を登り、すぐ 社員の方を見送って登山開始 道を登ると左岸への新しい 半。やっと十一時すぎて 送ってきたアシックス 車が到 廣さんを待つこと 着。 すぐに

> が橋の 先発隊が先行しているので追 りつく分岐点をすぎて山 く分かれ道をすぎ、雌岳へと取 い。さらに急な登りで滝壺へ行と谷間が狭った感じで昼なお暗 等の中型の照葉樹林帯で、ぐっ 備されている。ツバキ、サカキ つくためにピッチも早い。ひと 祀られている峠に出てひと休み。 ており、落石注意の案内板も整 方の雌岳側の岩の壁が切れ落ち なジグザグの急登となる。前 自 橋の上から滝が見上げられる 然の平石を階段状に並べた 跳んで 以前 日の神が

川に出る。これを渡り、やがて 汗を拭きながらの休止となる。 むようにして山頂へ。 かに登り、最後に左にへ廻り込 人工林(スギ林)の中をゆるや 山頂への指導標に従い下ると小 『県民の森』への道と分かれて ここからは水平に進む形で

が

影もカメラが五台も六台もシャ 登 ッターを押してもらうように頼 モニーが続く。全員での記念撮 三唱である。そして握手とセレ 囲んで今西流の「バンザイ」の んだ、たまたま登っていた女性 話に花が咲く。すぐに三角点を 山者も大忙しだ。 着と同時に久しぶりの再会で かと重廣さんを待っていた。 先発隊は食事も済ませて今か

撮影の クが本当の雌岳の山頂であった。 あったが、最後の七つ目のピー とピークがあり、 えていたが、登ってみると次々 いし、雌岳ということで軽く考 先発隊は先に雌岳に向かって出 張った岩を渡ったりした場 に取り付く。標高も雄岳より低 の案内板があり、そこから雌 米ぐらい下ったところが雌 発する。山の神の峠をおりて百 そこで先発隊と合流し、記念 後、すぐに下 隊も急いで昼食となる (行縢山頂で) 途 中口一 山開始。す ナの 面 岳

下には出発点の『むかばき少年には大崩山系の山々、そして真 然の家』の屋根が印象的 谷沿いに平坦な落ち葉のしきつ で県民の森コースへ出て、

首が痛くなるほどの真下からの め水量が少ないが、見上げると と五分遅れで下山路にて合 眺めであった。 ったが、残念ながら渇水期のた ため県民の森を経由 った岩峰伝 めた道を行くと先ほど通過した へ、落差八十米の見事な滝であ 一壺への案内に従って滝へ真下 の神の峠へ出る。後発隊は いのルートをとった した先発隊 流。 登

を渡し、 風呂上がりを待って七時から夕 呂にすぐに飛び込む。女性軍の 暮れた六時着。沸かしの露天風 軒家の鹿川山荘に日もどっぷり 帰りの四人に重廣さんが記念品 山深いふところに抱かれた一路今夜の宿鹿川山荘へ直行。 駐車場で今日だけ 残りは六台に分乗して 同行 した日

to 岳 を語りあって、そして售賃をして一人づつがそれぞれの感想 やげにして九時半には床につく 重廣さんとの楽しいお話し、そ の焼酎 歌となったようだ。 のサイン入りのバンダナをおみ なべややまめに舌つづみを打ち、 ビールを飲みながら最後は地元 渓谷 むかばきで買い 0 霧島を二本も空け、しし 水音が心地よい子守 込んだひでじ

十一時二十 コースタイム…行縢山 頂十五時十分、 十分~十三時二十五 御分、雄 駐車 岳山 頂十 分、 駐車

またロープも要所には張ってあ る滝が昨夜の冷え込みで凍結し 吹き出る登りで気分爽快となる。 が続く。すぐに昨夜のアルコー 照葉樹林の登山道となり、急登 じりの木の根につかまりながら、 へ渡るとまた急登である。岩ま ているのがあらわれる。谷を右 ころ、左手の豪快なスラブにあ きへと導く分岐の標識を通過、 谷に達する。左手へ岩場取り付 右下の沢から水音が聞こえると ルが抜けるような感じでひと汗 指導標の付近で車を林道の脇に プ場をすぎ、ほどなく鉾岳への ランクルで林道へ。鹿川キャン 石がゴロゴロとある谷を渡る 滝の全貌が見られる。そ 結した滝と正面する型と 腹をトラバース気味に登 発。すぐに気分のよい 。四台の

本峰への岳を横切るとひと登 くと指導標があり、左へ下ると へ出る。林道を三十米も左へ行 霜柱を踏んで登ると荒れた林道 いところはナメとなり、素晴ら った部分もあり、やや傾斜の緩 見られる。流れる谷が薄氷の張 の上部には人間の顔をした岩が い谷を渡りクマザサを分け、 真 出 L



枚着込んでみたがゆっくりと楽が急に谷から上がってくる。一 下に見える。 発点のキャンプ場のあたり む間もない。右手の樹間より (鉾岳山頂にて)

後にする。 員の拍手を受け、急いで山頂を つかある日」の二曲を演奏し全ーモニカで「雪山賛歌」と「い 食を少しばかり口にして記念簡単にビールで乾杯する組と 影の後、せつかく持参したハ

する。 きりとした車道となる。しかしたが、下りにかかる頃からはっ 右手の崖が崩壊したりでとうて 至るところで道はえぐられたり ことを考えて林道を下ることに 「離は長いが凍った谷や岩場下山は地図の確認をし、少 最初は荒れた林道であ 0

> あり、水のみやげとばかりに水 る道ではないことが後で分かっ 禁止の立て札があり、利用でき 大きくカーブ、そして又右へカ 筒に満タンにする。 造林小屋があり山水のホースが た。ほとんど下り終えた付近に しこの林道は入り口近くに通行 0 車の入れる道では 通行可能な林道となる。しか ブした地点くらいでやっと車 かってかなり下り、道は左へ ない。 北に

別れとなった。 念撮影の後解散。重廣さんとの ンプ場で昼食をとり、最後の記 を回収し、誰もいない鹿川キャ 点まで先行のS君の頑張りで車 林道と合流し、車四台置いた地 やがて、鹿川から今朝通った

十一時一○分、解散十二時三十林道九時三○分、キャンプ場着 九時三分、鉾岳山頂九時二〇分、谷を渡る八時三五分、林道 二〇分、岩場取り付き七時五七 ※ コースタイム…車止め七時

企画、「ふるさとの富士山とちることができた。来年は新しい きたし、また様々な企画で全国 ねて」という話も伺うことがで の山に登り続ける意欲も大した 廣さんの山に対する思いにふれ 0 <u>-</u> のである。 をたんのうし、少しでも重 の重廣恒夫さんと宮崎

「山が好き、人が好き」という 重廣さんのモットーである

T

は狭い。

そして冷たい

とを楽しみに。 るさとの富士山」で出会えるこ あろう素晴らしい山行でした。 少しでも今後の山行に役立つで であり、 また、来年も重廣さんと「ふ 廣ファンとなったことであり 不も味 今回参加したみんなが b 深く趣の あ る一言

年 なお、今回のメンバーの 齢は五十一 五歳でした。 4

### が例山行報告ほ 田原山 か

時に出発。裏道を通 十二月月 月二十六日 児玉

良

ないようである。四台の車で五年度は県内のためか参加者が少佐藤、私の計五人であった。本へ。参加者は西、安部、園田、 山香~大田道路に入り、六時十時十分出発。甲尾山の横を走る 雪が舞っていた。 五分鋸山トンネル駐車場着。二 台の車を残して「大山」へ。小 線、米良から高速経由でサニー 時三十分起床。大野町の実家を り、十号

と案内文をたよりに林道を登 ったのでヘッドランプを用意し 六時三十五分、まだ真っ暗だ 発。飯田さんのつけたテー いので厚めの防寒着をまと 林道は輪だちがくつき った。 途中

に両子 る。尾根に上がると眼下に村がかった。早々に軽装に切り替えい雪が舞っていたわりには暖か が手に 九時十五分、三等三角点のある過ぎたりトラバースしたりして、 見した。ここからは大田村方面 く高さを感じたのか、引き返 る山頂はトラバースして通過 見えた。何回か尾根のビークを はライトも サイレンが聞こえてきたころに て、登り、 ていたが、園田さんがなんとな 山頂に着いた。実は三角点のあ 取るように見える。さら 山などもはっきりと見え 冬で草も枯れていて歩 埋もれていたのを発 必要がなくなった。 L L

ら先が迷ってしまった。飯田さ記念撮影をして出発。ここか すら目の前に見える壁を見つめ 歩いたのだが………。ひた 30 天気も日本晴れと変わっていた。 三六〇度見渡せる。絶景である。 ちょうど大観峰(鋸山の)着。 んのつけたテープを探しながら て前進。苦労してやっと十二時 朝置いた車に乗り「大山」 一時にトンネルの所に降り着 出さ

という弱気の言葉も飛び出した バイトとなった楽しい山行であ にも恵まれ、久しぶりの大アル が、携帯もつながったし、天気 迷ったときは遭難?など

戻ろうという話になり、結局次 立てていたが、学校の餅つきに 五、一m)」に登ろうと計画を 六〇、八m)」「小門山(五三 泊まり、次の日、「大嶽山(五 職場の新採用教員)のところに このまま杵築の教え子(同じ (鋸山 (田原山) 頂で)

僚の竹 が、雪が積もっていたため下か 山行に参加)と実家に帰る途中 の日は玖珠にもどった。 しまい、暇になったのですぐ同 (緒方 る。「亀石山」、「万年 じ、普通車でもかなり登れる 餅つきも一○時頃に終わって 「吉武山 (九二六、五m)」 町米山 取るように見える。 田高校の後輩の衛藤先生 から地 頂近くまで林道が 出身:七月の月例 原を通 19

> 望はないが、林道途中からは 等三角点がある。山頂からの展ぐらいである。電波塔の裏に二 稲山(一〇三七・六m)」に登で、急遽、大分百山の一つ「野 うに見える。 ト山」「福万 山」「横山」「平家山」「カル の「八面山」、 道)が通じている。往復二時 頂まで素晴らしい?林道(+ 省」の電波塔が建ったため、 歩いたが、今は山頂に「建設 ので九州横断道路に車を止め った。ここも雪が積もっていた なりのブッシュと聞いていたの 「英彦山」「 m)」に登ろうと思ったが、 (山)が手に取るよ 津江の山 近くは「青野 (九五八 少中 で帰 ш 215 [#] 俥 T

> > ・足も手

伝って怒濤の

睡麻

が襲

の「三宅山」、庄内の「時山」、れた。冬休みは新年早々に竹田、二日続けての山行きでやや疲 山を攻めようと思っている。 昌寺山」「代三吾山」など低 三重の「秋葉山」、大野の「光

### 祖 ~傾 縦走

平成 年十月二十 その ~二十六日 1 114

麻 竜一

登っていくと、登り始めから2

間ほどでトラバースにかり、

祖 母 月 傾 四日 縦 走を計 (H phi L 始 めて

てきた。 さらに一

きで

低血圧なので朝は弱く、分のアパートを出発した。 をまとめて午前六時三十一に大 体調はだいぶ良く、天気+ 絶好 決断をあっさり撤回し、荷物 日よりとのことで、昨年の一 ずここ一番に弱い自 午前二時に目が覚めてすると めていた。しかし、 分が恨み 睡眠 なっ 変わ 0) 当

H

0)

枯沢をいくつか渡り、つべらに を考えてペースを抑えて中いた。 考えずにとばしすぎるので、先 り、三〇分ほど歩くと、白 違ったようだ。先が思いかられ らく植林 合を入れるためラジオ体品をし 岩尾根登山口がある。一〇〇 社 0) 1 緒 高、気分は上々。いつも多先を に移った。風もなく、天气は最 る。気を取り直してルートに戻 に出てしまった。早くも当 太でできた階段を登ると、 上がったところに車を停め、気 ってくるなか、およそ二時 て、八時五〇分に登山開始。 方町上 最後の民家を過ぎると、しば 尾根登山口がある。一○○m手前から右へ上っていく障子 登山口を通り過ぎると、 である、左へ入っていく傾へ の杉林を歩く。お 畑に到着。 メインルー 然林 を問 墓場 の丸 健男 間で

> がら景色を楽しな という、 北側は直下に倉木山、鳥嶽、竹ら笠松、本谷、尾平越、古祖母、がら景色を楽しむ。南側は傾か どこいっちょんのか」とぶつぶ せわしい時に帰っちくらせんじ、稲の脱穀作業をしながら「こん つ言っていたそうである。 目を凝らしていたころ、家では 由布岳の頂もはつきりと見えた。 は久住、大船、黒岳、さらには 田や緒方の集落が見え、遠方に 入田の我が家はどこかなどと l出会った。しばらく話をしないう、ぼんちおさむ似の男性 から ってきた

たそうで、途中のルートがかなから宮の原、大障子岩経由で来人れ違いで休憩していた。尾平よく出てくるタイプの登山者が いる場合ではない。休みすぎた を n べて、再びさきほどの休憩地点 m)に到着。握り飯をひとつ食ると、前障子頂上(一四〇九 切り立った一枚岩の斜面には口程度の登りではあるが、直下が いく。距離にしてわずか三〇m 障子ピークへと岩をよじ登って るぼんちおさむさんと別れ、前 1 た。岩場を越え、雑木林を抜け では済みそうもないところだっ やると一三時。人を見送って 荒れていた様子 戻ると、水戸黄門の代官役で さて、折り返して上 畑に下るのを見送り時計に目 なくなるほど説明してくれた。 プも鎖もなく、落ちると痛い 行く気が 畑に下 1)

が、この日 ダウンのない鞍部と軽く見て、 m 程 離二㎞、ビーク標高差も 時 間で行 障子から大障子岩間 図でも大したアップ けると考えていたの 最大の失敗であ H 四〇 Ιİ

かも、 なった。 を失っていた自 で、危うくキレる寸前まで理性木に向かって怒鳴りつける有様 となって襲ってくる。終いには ディ・フグの「かかと落とし」 り、まるでドーファイターアン 足下や顔の高さに横たわってお ようと進む トをたどりながら、早く脱出し ない。半日 も度を過ぎると精神衛生上よく のスズタケ道の長いこと。何事 に納得した。それにしても、こ 謝しながら、さっきの代官の話 を撫でる。雨天でないことに感ンネル状にさしかぶって葉が顔 りしている。ただ、マイナーコざめたが、幸いルートはしっか で二mはあり、ヤブこぎかと青 れが半端でなく、丈が高いも スズタケが待ち構えていた。こ 前 除子直 スのため、通りが少なく、ト 先の台風で倒れた雑木が 下を取 が、きりがない。し 状態でかすかにルー 分が恥ず n 卷 いて かしく 進

じゃなくてヤブが終わり、岩場そうこうしているうちにフグ 認するが、とにかく小刻みなア となった。先に目 崖を右に左に取り巻くルート をやっては

ムの倍の二時間もかけて、一五していった。結局、コースタイ時間とともに確実に体力を消耗を沈めなければならないため、 八m) にへばりついた。時、ようやく大障子岩(一四五 時をがいやはッ し元気が出てきた。とはいえ、光のなか、祖母が姿を現し、少たが、太陽が西に傾き始めた逆 展望は前障子ほどではなかっ つかえないように余分に身体 が、下をくぐるときはザック 機だ。低特に北側

たが、太陽が西に傾き始めた逆と元気が出てきた。とはいえ、し元気が出てきた。とはいえ、祖母までコースタイムで三分の一、地図上では直線距離にして半分を残している。あと三時間はかかりそうだ。

大障子岩からの急な下りを過ぎると、ルートもだいぶましになったが、疲労がたまり、血糖値が下がってきたため、登りになると脚が上がらない。糖分をおるとにかく歩を進める。八万越を過ぎ、池の原の展望もそこそこに、尾平への下りと分かれる宮の原に着いたのは、辺りれる宮の原に着いた一七時であった。よくなりかけた一七時であった。

り切れ)。 れ)。日 ってしまい、電気のない小れ)。目指す祖母九合目小であと一時間。にぎり飯をて小休止し、夕暮れの中を発。馬の背手前でようやくが視界に入った。辺りは暗がにある。

> つが、一八時でまれた。 同障子で休みす で休みす

ところ 八時二 日理人( 一人(加

・組母の方が展望も らしい。ただ、今回 、距離はま

った。(以下次号)
も、寝ることにした。新品のシおすすめらしい。いずれにして

## 度あることは 度ツ?

### あ ず 3

大晦日だが、夜更かしを撮って を上りと下りを譲り合いながら地 が成立、行者小屋まで下る。 をしい初日の出を見るためにし、 が上りと下りを譲り合いながら地 に、行者小屋まで下る。 をしい初日の出を見るためにし、 がよるものではない。そのうりに、 を地とあって、多くの登山者が 大晦日だが、夜更かしをがら地 に、年越しそばの準備ができためにした。 を中でもマイナス六度。なかなから地 に、年越しそばの準備ができたが。 と小屋のアルバイトがテン場中 に、年越しそばの準備ができたかた。 と小屋のアルバイトがテン場中 と小屋のアルバイトがテン場中 といるのではない。そのうち

ながらいる てとしい誰早 か嫌ない いた遠藤さんがセキ がつぶやくと一番 通り」と答えた。なん 藤さんがセキをしなが キだな・・・と不占 端に寝 .

ル九年十二月二十八日。奥穂 気味の私は病院で、山に行くの でひどくなっても心配ないよう に薬をたくさんもらった。 こ十九日、高山から新穂高温

二十九日、高山から新穂高温 泉に入り、いよいよ雪の上を歩 くこと二時間、白出沢出合にテ ントを張る。恢晴の奥穂の頂上 を思い浮かべ、心地よい緊張感 のうちに深い眠りに就いた。ッ なんだか嫌なセキだな・・・とくるセキ・セキ・セキ・ 不吉な予

の隣に寝ていた私の番が来たよ の隣に寝ていた私の番が来たよ があたがたと震えてる私の の隣に寝ていた私の番が来たよ どうやらテントの横で西田さんが、 が、夜中に発病。 100 ルエンザにかかの端から寝てい

ったところでま た震えながらガスを付

たシュラ

17

て温

寒くて仕方がない。がたが再びシュラフにもぐりこん

送っ

もない症 遠藤さんも、千葉の西田さに専念することとなる。静 ナーのお言葉で、一週間は静養間きたくない」とワンマンオー 分まで帰った。「そんなセ る熱にふわふわと踊るように大 染だった。 たようで、 状だったことは言うま その後三九度を超 īE. しくテント 田さん 牛 の養 は to

ていく橋井さんには、とてもとていく橋井さんには、とてもといている。上から見た景色は格いている。上から見た景色は格いている。と思いながら、寝たのはいいが、それからが戦いの始まりだった。ひと眠りしたかと思うとセキが襲ってきて止まらない。寝ている「人に迷惑になない。寝ている「人に迷惑にならないようにと我慢するともっと激しく咳き込んでしまう。涙が出るほど咳き込んでしまう。涙とからからようにと我慢するともっとかっといようにと我慢するともっとかっという方もと、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すでに朝まると、すると、またというというには、とてもというには、とてもというには、とてもというには、とてもというには、とてもというには、とてもというには、とてもはいる。 て登に林沢岳 いを取取 ちり界西 さて、 西尾根 登ってい り付いた途端、から発までの行程だった。 のとも ていく二人を見送の行動は無理と判断 せずスイスイ 鎌には、 75 た。尾 なり F も登の尾のはとつ急根森澗

年続きで不吉な予

感

は 見 事

た。テントキーパーは正解だっ になり、肺炎すれすれと言われ お二人にはずいぶん迷惑をかけ たことになるが、一緒に行った てしまった。 元旦早々、救急病院のお世話

くなるかも知れないとは思いな 行にチャレンジしてみませんか。 か勇気のある方、私とお正月山 は三度ある・・・ッと。どなた 誰かに言われた。二度あること 恥を忍んで告白する決心をした。 稿を書いて」と泣いて頼むので、 がらも、編集長の飯田氏が「原 と年末、誰にも誘ってもらえな を会報に載せると、もしかする 引き山行となった。こんなこと 二年続きでお正月山行は風邪

> "シリオ"の登山靴を購入して、 というもくろみがあった。 その初おろしを元日の第一歩 い換えて二○○○年の元日に新 はいて親しんでいた登山靴を買 た。そしてもう一つ、一五年も しい靴で迎えようとはりきって

る午前零時前に起きて、TVで 台に四名のメンバーで出発。 なり、S君の到着と同時に車一 行するS君の電話が目覚ましと 少し仮眠をして午前三時半、同 に初詣をすます。それからまた し、例によって近くの神社二社 のカウントダウンの瞬間を実感 く寝ついたが、丁度日付の変わ いつものようにおおみそかも早 な天候になるとの予報であった。 前夜の天気予報ではおだやか

もあまり寒くない。おろしたて までとばす。同行の三人も汗で の靴のはき心地も快調に合野越 の月が冷たく光っている。気温 ば空には満天の星が輝き、上弦 と一台のスペースを見つけて駐 ぱいだ。近くの車道の脇にやっ 車。四時四五分出発。見上げれ 一枚脱ぐほど寒くない。 由布岳登山口はもう車がいっ

藤 英 ム記念登山

える。 何人か追い越す。樹林帯を抜け る頃、見上げれば先行パーティ かかる。ヘッドランプに照らさ の明かりがジグザグの道状に見 れた道をただもくもくと急ぐ。 ンバーは待たないと告げ登りに 合野越からは後続の遅れるメ

た。その山も、久住山の時もあ に登るのが習慣となってしまっ 日の早朝に初日の出を拝みに山

ったし鶴見岳に登ったこともあ

組がおもしろくなくなってから、

いつのころからか紅白の歌番

おおみそかの夜は早く寝て、元

布院の街の明かりがはっき

たらとの思いはことさらであっ の年であり、良い日の出が拝め 特に西暦二〇〇〇年という記念 岳と決めている。しかも今年は ったが、この数年はずっと由布

> る。 山道は登るものであり、歩く距表示は必要ないのではないか。 ずと時間は違ってくるものであ の傾斜や道の状態によっておの 離は同じ一〇〇メートルでもそ のあと何百メートルとい距離の る。いつも思うのだが、山道で 上だと親切に立て札を立ててあ 態で眼下に見えてくる。一つの りと、ややうす霧のかかった状 カーブにあと何百メートルで頂

この頃から東の空が少しずつあ いっぱいとなる。 ンロにてお湯をわかす。待って くのどを通っていく。すぐにコ ある。五分遅れて着いたS君を 時五十五分着。先行者多数東側 明けてくるのがわかる。山頂六 東峰へと向かう。空が少しずつ いる間も続々と登山者で山頂は 待って乾杯のビールが気持ちよ のよい場所にはいっぱいの人で 休むも風がでたようだ。すぐに とみえてくる。またえにて少し そのやや左に祖母山がうっすら 振り返れば、九重連山、そして かみをおびた状態になってくる。 てくる。また何人かを追い越す。 る頃より先行者もペースが落ち ぎ、石まじりの急傾斜地にかか 東の空もだんだんより輝きを やがてジグザグのコースを過

ない。やがて皆待っていた東の にて空腹の腹を満たす。気温は 増してくる。七時五分、遅れて 丁度零度。風も思ったほど強く いた後続組到着。紅茶とケーキ

> 光がさし込む。御来光とはこの 水平線となった雲間より一条の

> > でいった。



なる。 かったような最高の初日の出と 七時一七分だ。この数年でもな ていた人達の間からわきおこる。 に向かって期せずして『万歳』 『万歳』の声が山頂にて集まっ 二〇〇〇年の黄金に輝く太陽 (由布岳山頂の御来光)

受けて何回も何回も舞って飛ん りとせん回しながら元日の風を ライダーが舞っていた。ゆっく よりスタートした一人のハング 守ケ城に着いた時、由布の中腹 うに飯守ケ城へ向かう。丁度飯 後続の組を待って、いつものよ に下り、新しい靴は下りも快調。 下山していく。合野越まで一気 した御来光を見た人達が足早に やがて日が昇ると山頂は満足 ことだ。



若水を水筒に満たし、別府柴石 ちよく入浴をして元日の恒例と 温泉にて冷えた体を温め、気持 なった行事を終えた。 に参拝して、神社の湧水である 帰路は塚原に寄って霧島神社 (元日の由布岳 山頂)

った。 きあえるような元日の登山であ な、そして新しい靴とも長くつ 登山ができるのを象徴するよう 今年も又快適でそして安全な

## 私の無名山ガイドブック 佐間岳・米花山

飯 田 勝 之

伯へ向けて弥生町の直線を進む 国道10号線を大分から佐

も重なる山なみの中の二つの端 の朝などは、霧にかすみ幾重に 気になっていた。特に雨上がり を南下する時はこの二つの峰が 立つ山で、わたしはいつもここ 正な姿は目を引く存在である。 初夏のある朝、私はこの二つ 標高の割には良く目 の三角形の 奥が米花 山が見

の山を目指すことにした。 弥生町から本匠村に入る三叉

細くなる。 分かれた道をしばらく行くと細 土手の上の道をとり、次に右に ほどで番匠川にかかる橋を渡り、 がある。これを入ると一〇〇に 川に向かって直角に分かれる道 路を入って、県道三重弥生線を むとやがて民家が切れ、道も から来た道のトンネルを見て の集落に入り、さらに右に切 むと約一\*。口ほどで左に番匠 ここからは林道のよ

ことにした。 らないところに車を置いて歩く る。せっかくの山歩きだ、民家 なくなったあたりの邪魔にな 道は細いながら舗装されてい

装路を右に左にカーブしながら して道は次第に急になった。舗 いていくと右に荒れた分かれ道 る。コンクリートの舗装路を歩 ットが豊富そうなスギの林であ まる。いかにもフィットンチ の中を始めは緩やかな坂道で 良く手入れされたスギの そこから左に急カーブ 造林

> こまで来れるようである。集落 らいである。 分ほど、距離にして二、五\*。く である。その横がコンクリート りどんどん行くと再び舗装路と はずれの最後の民家から約五○ の広場になっており、車でもこ れた。今度はNTTのアンテナ なりまた目の前にアンテナが現 ナが現れる。道はゆるやかにな の前に真新しいDOCOMOのアンテ 三〇分ほどで舗装が途切れ、目 登っていくと集落のはず から

やたらとアンテナの多い山であ こと数分で稜線に出た。稜線に これに踏み込む。雑木とスギの 維所NHK、OBS、 る。プレートを見ると「弥生中 の前にまたアンテナが現れた。 真っ直ぐに登ると三、四分で目 地、西側がスギの造林地の間を 後がある。東側がクヌギの造林 は右下から登ってきている踏み 混じった林の中の踏み後を登る がる小さな踏み後があったので その少し手前の崖を、斜めに上 れる。道はここで行止りである 六〇なほどでまたアンテナが現 が 延びており、これを行くと五広場から北向きに草つきの道 広場から北向きに草つき TOS

シ、カゴノ、キクマノミズキな 前にあった。山頂はサクラやカ 点は広場の南西すみ、祠の斜め 祠が三つ並んでいて、三等三角 さな広場があり、すみには石のアンテナの裏手の茅の中に小 がり囲 んで展望は望めない。

> 間からは、元越山から場照山に せるところがあった。 つらなる県境南郡の山々を見渡 頂上からの下りのクヌギ林の樹 ナのコンクリート広場に出た。 と十分足らずでNTTのアンテ は稜線をまっすぐに下る

である。この道に入って最初のに整備された二車線の舗装道路への案内標識があった。きれい 切れてしまった。 めのうちはアスファルト舗装で 谷線の標識が立っていた。はじ 花山への入り口である。林道新 って入る林道がある。ここが米 って一〇〇にほどで右上に向か 集落、屋敷ノ原を過ぎ左岸に渡 と左に渡る橋が在り、銚子渓谷 あるが一、三\*"ほどで舗装は途 ある波寄から二、八\*"ほど行く に入る県道三重弥生線に引き返 し、県道を進むと本匠村役場の 次に米花山を目指す。本匠村

がらゆっくりと高度を上げていある。林の中を道はカーブしながり、まるで花が咲いたようで はできない。だが下から山頂を確認すること 見える。その右手が山頂のはず るか上の方に大きなアンテナが く。時おり展望が開けると、は 白と色とりどりに新芽が燃え上 樹の林は萌え盛りで、赤や黄色 ころにスペースを見つけて駐車 することにした。谷沿いに照葉 乗用車にはつらいし、せっかく 砂利道はかなり荒れており、 山歩きなので林道の適当なと

いている。

と記されている。

や下る道とに分かれている。地 図には出ていないが三叉路を右 道入り口から約三・五\*"ほど) にとることにした。椎茸を栽 で林道は右に上がる道と左にや

える塔で、 弥生町の国道一○号線からも見 かる。緩やかに登って行くとや 南を巻いて最後の登りにさしか 地図上の山頂の西の小ピークの 脇をまっすく進むと、道は少し のゲートが張られている。そのれ、入り口に鹿の侵入を妨ぐ網 向う、遙か遠くまで展望が開け広い稜線が全て伐採されてその 明るくなった。目の前の平らな 開け、中ノ嶺・場照山などの県 中何度か道の崖の上から展望が がて目の前に巨大な塔が現れた 登ったあとやや下ることになる 三十なほど先に左に作業道が別 ているのである。稜線を東に二 で道は稜線を越し、前面が急に ていくと、三叉路から約二五分 境の山並みを望むことができた に急になっていく道を進む。途 している杉林などを過ぎ、次第 樹林の中のジグザグ道を登っ 第2電 電の看 板がつ 培

内を探してみると三○にほど奥 このあたりが頂上である。広場 わ に三等三角点を見つけることが 設置されている広場に着いた。 アンテナの 北側の林の中に分け入り、林 れた広い道を進 脇を過ぎ、 造むと一○○メー過ぎ、草に被

> 林に被われ いほど平らな広い山頂で、 できた。どこが頂上 地、西は照葉樹の二次 れ、展望は全くなかっ か分から 東 は

椿山、更に遠く碁盤ケ岳、彦岳岳、佩楯山、その背後には傾山、岳、佩楯山、その背後には傾山、留を楽しむことができた。酒利の小高い鼻に出て素晴らしい眺 えた。 せる。そして背後には先ほど立と郡境の主な山々がすべて見渡 い造林 った米花山の頂がすぐそばに見 ○○にほど行くと広大な稜線 業道を行ってみた。この道を二 入り口の鹿のゲートを開けて作 下山 は 地の展望を楽しむため、 を引き返すが、 上

戻して長い林道を下る。 して銚子渓谷の新緑を楽しむこ 帰る途中は車で少し足を伸

# 平成十一年

ある。 レスアップした御婦人ばかりで加は、ちょっと恥ずかしい?ドホパール焼けの小麦色での参

五八八に登頂学生部、四川午後二時、四川省の雪宝 頂五 省

帰りは鹿避けのゲートを元に

佐藤浩幸氏は晩餐会初参加と重 白き峰々の画 支部副支部長の母校学習院大で に心を奪わ ドメイン峰 彼の笑顔は輝いていた。 たひとときであっ 面と報告者の 語り

ダ山岳会と合同計画。 タプロジェクト二〇〇〇より、 - 夕峰登山とカナディアンロッ 三時二〇分カナダ・アル アルバータ峰三六一九は一九 トレッキング六〇名、カナ 頂七五周年記念に、アルバ バー

らず、 パーと実物ミニの展示であった。 山で使用のカマボコ型、ウイン ニテント一二張り白雲の間、冬 志の写真展、テントの歴史展ミ 的海外登山であった。この時山 毎年出席している。ドリンクコ 満ち満ちている。これが魅力で 等で忙しくうごめく様は活気に はアルパインスケッチクラブ有 き、四時受付に行くがまだ決ま 頂のピッケルのエピソードを聞 隊が初登頂した、日本初の本格 二五年槙有恒隊長の日本山岳会 ブタイ、Tシャツを買ってにこ 「どこの山」「元気」「孫は」 ナ、ダウンジャケット、クラ 知人の姿を見ては立ち止まり、 展示会場へ。慶雲の間で

テーブル名を指定したメモを見 マスターと受付で地方会員は、 山名のテー 会長挨拶、六千人の力を結集 北辰晩餐会場へは、テー ブル

> A C 山 しよう、クラブソング制作、

> > たことを思

いま は ーよ

る。 会長が披露。ベルギーのフィリ 席します。 国旅行のため大変残念ですが欠 ずうずうしかったと反省して ないチャンスである。ちょっと も山岳会員でなければ與えら やいだ空気がただよう。氏と二 新入会員は二三九名。乾杯、テ ップ皇太子の結婚式出席のため ろしくお伝えください」と大塚 人だけの写真におさまる。これ ーブルマスターを中心に自己紹 次は名誉会員、永年会員紹介 皇太子殿下のメッセージ「外 空港より会場へ。笑顔に華 前総理橋本龍太郎会員帰国 出席者の皆さまによ n

るほど美しい景色である。 ルプス り神宮行きバス一〇分で登山口 筑波駅直通バス二時間。ここよ の写真入りカレンダー、来店客 さい。」お土産は名簿と日本ア 支部会員の皆様「参加してくだ 「これください。」とといわ 支部 五日は筑波山へ。八重洲ロー 蝶ケ岳ヒュッテ大滝山荘 紹介、今年は三名でした n

月には筑波駅まで汗だくで歩 ックで歩く。私はケーブル上の 一等三角点に挨拶。晴天、岩場 駅で店に荷物をあずけ、女体山 着。大塚会長は下より両手スト には筑波駅まで汗だくで歩い穂高と本部総会の次の日、五 野が一望である。 民のかまどではな

> 神社は紅葉が美しく、山の力を VI お願いして別れる。まだ筑波山 皆さんに別府温泉と久住登山を がする。帰りの時間を気にし、 を食べたら来年は東九州」と声 はカボスサブレを渡す。「これ 記念写真をすまして弁当。青森 もう帰ると云う声があり、先に の人と定位置へ。全国からの為 集合で、駅近くにいると集会係 右まわりなら会えずじまい。 りしたら衛藤氏(大分)に会う からはりんご、毎年である。私 「不思議」と喜びの声。一二時 ただいて東京へ。 次に男体山へ、神殿を左まわ

## )役員会からお願い お 知

会員の い山仲間の入会を誘ってくださ 会金が免除されます。 い。二五歳以下の新入会員は入 ました。会員百名を目指し新し 支部 拡大を目指すことになり 結成四〇周年記念を前に

## 二月月例 行の ご案内

. 日時 午前五時サニー出 |月二十日 (日) 発

定期総会の開催

日

四月一

五日(

まで 田原山下 湾リレー 登 Ш ルー

### 四 0 周年記 念誌 稿募集

の他 待ちしています。 皆さんの積極的な投稿を 歌、俳句、写真、絵、そ各会員の投稿の随想、

世下さい。 to の間に海外登山をなさった方は 年三月三〇日までとします。こ 九九〇年七月四日から二〇〇〇 活動状況、 二、海外登山報告 国目的の山、・ピーク、主ないれなく概要(活動期間、 地域 参加者名等)をお知 対象は

月末となっていますが出来るだ 四・提出先事務局(サニー けお早めにお願いします。 スポーツ)まで 三・締め切り二〇〇〇年五 1057) (担当 安東桂三 097-568-

### 準備会の開催 四 0 周年記念事業準備 など当面の予定

・二月一五日 コンパルホー 午後七時より

・三月二二日 コンパルホー 午後七時より 三一〇号 四〇七号 ル 室

から鹿鳴 場

所

コン

パルホー

視聴覚

午後六時より

です。 四回発行(四月、七月、十 も九州の山の雪は少ないよう 一月)を定着させようと努力 平成十一 暖冬のせいでしょうか今 年度から会報の 月 年

しています。 員の皆様の投稿をお待ちして います。 次回の発行は四月です。 K I

20 発行者 0年 (平成1 2 徳之 木田 梅 秀 編集者 勝 飯 発行所 870-0021 ₹

大分市府内町1-3-16 サニースポーツ内 西 孝子 TEL·FAX 097-532-0926 佐藤正八